

かちかち山

楠山正雄

青空文庫

むかし、むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがありました。おじいさんがいつも畑はたけに出て働はたらいていますと、裏うらの山から一ぴきの古ふるだぬきが出てきて、おじいさんがせつかく丹たん精せいをしてこしらえた畑はたけのものを荒あらした上に、どんどん石いしころや土つちくれをおじいさんのうしろから投なげつけました。おじいさんがおこつて追おっかけますと、すばやく逃にげて行いつてしまいます。しばらくするとまたやつて来きて、あいかわらずいたずらをしました。おじいさんも困こまりきつて、わなをかけておきますと、ある日、た

ぬきはとうとうそのわなにかかりました。

おじいさんは躍り上がって喜びました。

「ああいい気味だ。とうとうつかまえてやった。」

こう言つて、たぬきの四つ足をしばって、うちへかついで帰りました。そして天井のはりにぶら下げて、おばあさんに、

「逃がさないように番をして、晩にわたしが帰るまでにたぬき汗をこしらえておいておくれ。」

と言いのこして、また畑へ出ていきました。

たぬきがしばらくぶら下げられている下で、おばあさんは白を出して、とんとん麦をついていました。そのうち、

「ああくたびれた。」

とおばあさんは言^いって、汗^{あせ}をふきました。するとそのときまで、おとなしくぶら下^さがっていたたぬきが、上から声^{こえ}をかけました。

「もしもし、おばあさん、くたびれたら少^{すこ}しお手伝^{てつだ}いをいたしましよう。その代^かわりこの縄^{なわ}をといて下^{くだ}さい。」

「どうしてどうして、お前^{まえ}なんぞに手伝^{てつだ}ってもらえるものか。縄^{なわ}をといてやったら、手伝^{てつだ}うどころか、すぐ逃^にげて行^いってしまいうだろう。」

「いいえ、もうこうしてつかまったのですもの、今^{いま}さら逃^にげるものですか。まあ、ためしに下^おろしてごらんなさい。」

あんまりしつこく、殊^{しゆしよう}勝^{しょう}らしくたのむものですから、おばあさんもうかうか、たぬきの言うことをほんとうにして、縄^{なわ}を

といて下ろしてやりました。するとたぬきは、

「やれやれ。」

としばられた手足をさすりました。そして、

「どれ、わたしがついてあげましょう。」

と言いながら、おばあさんのきねを取り上げて、麦をつくふりをして、いきなりおばあさんの脳天からきねを打ち下ろしますと、「きやつ。」という間もなく、おばあさんは目をまわして、
たお倒れて死んでしまいました。

たぬきはさつそくおばあさんをお料理して、たぬき汁の代わりにばあ汁をこしらえて、自分はおばあさんに化けて、すまして顔をして炉の前に座って、おじいさんの帰りを待ちうけていま

した。

夕方ゆうがたになつて、なんにも知らないおじいさんは、

「晩ばんはたぬき汁じゅうが食たべられるな。」

と思おもつて、一人ひとりでにこにこしながら、急いそいでうちへ歸かえつて来きま

した。するとたぬきのおばあさんはさも待まちかねたというように、

「おや、おじいさん、おかいんなさい。さつきからたぬき汁じゅうをこ

しらえて待まつていましたよ。」

と言いいました。

「おやおや、そうか。それはありがたいな。」

と言いいながら、すぐにお膳ぜんの前まえに座すわりました。そして、たぬき

のおばあさんのお給きゅうじ仕じで、

「これはおいしい、おいしい。」

と言つて、舌つづみをうつて、ばばあ汁のおかわりをして、夢中になつて食べていました。それを見てたぬきのおばあさんは、思わず、「ふふん。」と笑うひょうしにたぬきの正体を現しました。

「ばばあくつたじじい、

流しの下の骨を見ろ。」

とたぬきは言いながら、大きなしつぽを出して、裏口からついと逃げていきました。

おじいさんはびっくりして、がっかり腰をぬかしてしまいました。そして流しの下のおばあさんの骨をかかえて、おいおい泣いた。

ていました。

すると、

「おじいさん、おじいさん、どうしたのです。」

と言つて、これも裏うらの山やまにいる白しろうさぎが入はいつて来きました。

「ああ、うさぎさんか。よく来きておくれだ。まあ聞きいておくれ。

ひどい目にあつたよ。」

とおじいさんは言いつて、これこれかういうわけだとすつかり話はなしをしました。うさぎはたいそう氣きの毒どくがつて、

「まあ、それはとんだことでしたね。けれどかたきはわたしがきつとつて上あげますから、安あん心しんしていらつしやい。」

とたのもしそうに言いいました。おじいさんはうれし涙なみだをこぼし

ながら、

「ああ、どうか頼みますよ。ほんとうにわたしはくやしうつてたまらない。」

と言いました。

「大丈夫。あしたはさつそくたぬきを誘い出して、ひどい目に合あわしてやります。しばらく待まっていていらつしやい。」
とうさぎは言いつて、帰かえつていきました。

二

さてたぬきはおじいさんのうちを逃にげ出だしてから、何なんだかこわ

いものですから、どこへも出ずに穴あなにばかり引ひつ込んでいました。するとある日、うさぎはかまを腰こしにさして、わぎとたぬきのかくれている穴あなのそばへ行いつて、かまを出だしてしきりにしばを刈かっていました。そしてしばを刈かりながら、袋ふくろへ入いれて持もつて来たかち栗ぐりを出だして、ばりばり食たべました。するとたぬきはその音おとを聞きつけて、穴あなの中からのそのそはい出だしてきました。

「うさぎさん、うさぎさん。何なにをうまそうに食たべているのだね。」

「栗くりの実みさ。」

「少すこしわたしに出来ないか。」

「上あげるから、このしばを半はんぶん分む向むこうの山までしよつていつておくれ。」

たぬきは栗くりがほしいものですから、しかたなしにしばを背せ負おつて、先さきに立たつて歩あるき出だしました。向むこうの山まで行くと、たぬきはふり返かえつて、

「うさぎさん、うさぎさん。かち栗くりをくれないか。」

「ああ、上あげるよ、もう一つ向むこうの山まで行ったら。」

しかたがないので、またたぬきはずん先さきに立たつて歩あるいていききました。やがてもう一つ向むこうの山まで行くと、たぬきはふり返かえつて、

「うさぎさん、うさぎさん。かち栗くりをくれないか。」

「ああ、上あげるけれど、ついでにもう一つ向むこうの山まで行つておくれ。こんどはきつと上あげるから。」

しかたがないので、たぬきはまた先に立つて、こんどは何でも早く向こうの山まで行きつこうと思つて、うしろもふり向かずにせつせと歩いていきました。うさぎはそのひまに、ふところから火打ち石を出して、「かちかち。」と火をきりました。たぬきはへんに思つて、

「うさぎさん、うさぎさん、かちかちというのは何だろう。」

「この山はかちかち山だからさ。」

「ああ、そうか。」

と言つて、たぬきはまた歩き出しました。そのうちにうさぎのつけた火が、たぬきの背中のしばにうつつて、ぼうぼう燃え出しました。たぬきはまたへんに思つて、

「うさぎさん、うさぎさん、ぼうぼうというのは何なんだろう。」

「向むここの山はぼうぼう山だからさ。」

「ああ、そうか。」

とたぬきが言ううちに、もう火はずんずん背せなか中に燃もえひろがってしまいました。たぬきは、

「あつい、あつい、助たすけてくれ。」

とさけびながら、夢むちゆう中でかけ出だしますと、山風やまかぜがうしろからどつと吹ふきつけて、よけい火が大きくなりました。たぬきはひいひい泣なき声こえを上げて、苦くるしがって、ころげまわって、やっとのことで燃もえるしばをふり落おとして、穴あなの中なかにかけ込みました。うさぎはわざと大きな声こえで、

「やあ、たいへん。火事だ。火事だ。」
と言いながら帰かえつていきました。

三

そのあくる日、うさぎはおみその中に唐とうがらしをすり込んでこ
うやくをこしらえて、それを持もつてたぬきのところへお見舞みまいに
やって来きました。たぬきは背せ中なか中大ちゅう大おほやけどをして、うんうんう
なりながら、まつくらな穴あなの中なかにころがっていました。

「たぬきさん、たぬきさん。ほんとうにきのうはひどい目にあつ
たねえ。」

「ああ、ほんとうにひどい目にあつたよ。この大おおやけどはどうしたらなるだろう。」

「うん、それでね、あんまりき気の毒どくだから、わたしがやけどにいちばん利きくこうやくをこしらえて持もつて来きたのだよ。」

「そうかい。それはありがたいな。さつそくぬつてもらおう。」

こういつてたぬきが火ぶくれになつて、赤あか肌はだにただれている背せ中なかを出だしますと、うさぎはその上とうに唐とうがらしみそをところかまわずこてこてぬりつけました。すると背せ中なかはまた火がついたようにあつくなつて、

「いたい、いたい。」

と言いいながら、たぬきは穴あなの中をころげまわっていました。う

さぎはその様子ようすを見てにこにこしながら、

「なあにたぬきさん、ぴりぴりするのははじめのうちだけだよ。

じきになおるから、少しの間あいだがまんおし。」

と言いつて帰かえつていきました。

四

それから四、五日にちたちました。ある日ひうさぎは、

「たぬきのやつどうしたろう。こんどはひとつ海うみに連れ出だして、

ひどい目にあわせてやろう。」

と独ひとり言ごとを言いつているところへ、ひよっこりたぬきがたずねて

来きました。

「おやおや、たぬきさん、もうやけどはなおったかい。」

「ああ、お陰かげでたいぶよくなったよ。」

「それはいいな。じゃあまたどこかへ出かけようか。」

「いやもう、山はこりごりだ。」

「それなら山はよして、こんどは海うみへ行こうじゃないか、海うみはお

さかながとれるよ。」

「なるほど、海うみはおもしろそうだね。」

そこでうさぎとたぬきは連れだつて海うみへ出かけました。うさぎが木の舟ふねをこしらえますと、たぬきはうらやましがつて、まねをして土の舟ふねをこしらえました。舟ふねができ上あがると、うさぎは木の

舟ふねにの乗りました。たぬきは土つちの舟ふねにの乗りました。べつべつに舟ふねをこいで沖おきへ出ますと、

「いいお天気てんきだねえ。」

「いいけしきだねえ。」

とてんでんに言いいながら、めずらしそうに海うみをながめていました。うさぎは、

「ここらにはまだおさかなはいないよ。もつと沖おきの方ほうまでこいで行いこう。さあ、どつちが早はやいか競きよう争そうしよう。」

と言いいました。たぬきは、

「よし、よし、それはおもしろかろう。」
と言いいました。

そこで一、二、三とかけ声をして、こぎ出しました。うさぎは

かんかん舟ばたをたたいて、

「どうだ、木の舟は軽くなって速かろう。」

と言いました。するとたぬきも負けない気になって、舟ばたを

こんこんたたいて、

「なあに、土の舟は重くなって丈夫だ。」

と言いました。

そのうちにだんだん水がしみて土の舟は崩れ出しました。

「やあ、たいへん。舟がこわれてきた。」

とたぬきがびつくりして、大きわぎをはじめました。

「ああ、沈む、沈む、助けてくれ。」

うさぎはたぬきのあわてる様子ようすをおもしろそうにながめながら、
「ぎまを見ろみ。おばあさんをだまして殺ころして、おじいさんにはば
あ汁じるを食くわせたむくいだ。」

と言いいますと、たぬきはもうそんなことはしないから助たすけてく
れと言いって、うさぎをおがみました。そのうちどんどん舟ふねは崩くずれ
て、あつぷあつぷいうまもなく、たぬきはとうとう沈しずんでしま
いました。

青空文庫情報

底本：「日本の神話と十大昔話」 講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年5月10日第1刷発行

1992（平成4）年4月20日第14刷発行

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003年8月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

かちかち山

楠山正雄

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>